

ヴァルドルフ教育実践の場における親と教師の「公」と「私」

ドイツのヴァルドルフ学校における親・教師にとっての学校と「社会」とに注目して(1)

青柳 亮子

0 課題と方法

0-1 本論の目的

本論では、ルドルフ・シュタイナーの教育思想を拠り所とするヴァルドルフ学校における親と教師の活動を、教育の私事化ということを念頭に置きつつ、「個」あるいは「私」と社会との関係という視点から分析する。初のヴァルドルフ学校が設立された1919年当時と第二次大戦後から現在にかけては、特に「個の尊重」が共通の論点として扱われるが、この「個の尊重」は、「個」もしくは「私」の概念の歴史的変容を踏まえて検討すべきである。たとえば、他者との共通の文脈の下に公共性の中で自己に収束する「個人化」、あるいはその文脈がある程度解消され、公共性よりも自己が優位に立つ「私化」、などのように。

教育を受ける者の「個」に光が当たるようになった新教育における「私事化」を考察するには、各時代における「私」（「個」）と「公」の教育の当事者たちにとっての意味合いに目を向ける必要がある。その見方が、シュタイナーの教育思想の各時代における受容、そしてドイツ新教育におけるヴァルドルフ教育の位置付けを明らかにする土台となる。

1919年時には、民間の工場経営者が自らの理想とするシュタイナーの教育思想実現のために学校を設立したという点で、国家から民間への設置者の私事化が達成されたが、子どもの社会化の営みとしての教育への意識は、シュタイナーや教師たちと、親の間に開きがあった。他方、今日のヴァルドルフ学校では、学校経営の当事者として積極的な学校参加と教師との協働が親に要求される。この事実を踏まえつつ、今日のドイツのヴァルドルフ学校における文脈での私事化に着目する。第一次世界大戦敗戦後の社会的混乱の中であって、ドイ

ツをいかに救うかという問題に直面していたシュタイナー自身の思う「個人の社会化」と、現代の親・教師のそれとは、「自立した人間」像がいかに異なり、また共通性を持つか、ヴァルドルフ教育の当事者にとって「私事化」の意味合いがいかに変容してきたか。教育社会史の視点からは、以上を明らかにすることが必要となるが、本論ではインタビュー・アンケートなど、ある程度自覚的な語りによって現代の親・教師が持つ教育・社会へのイメージを浮かび上がらせるため、それらの一端が表れていると思われる学校内での彼らの活動のいくつかを分析し、彼らの中の「公」と「私」の位置づけを考察する。まず本稿では彼らの教育観や学校外部に関する考え方を分析し、次稿では有機体と呼ばれるヴァルドルフ学校という共同体への親のかかわり方について述べることにする。

0-2 研究方法・調査対象

本論は、文献調査を中軸に、ヴァルドルフ学校数校における訪問調査によるデータを用いながら進めた。

調査対象はドイツ北部、シュレースヴィヒ・ホルシュタイン州の4校と、南部、バーデン・ヴュルテンベルク州の学校である。この2地域を選択した理由は、以下の通りである。

まず、1919年に世界最初のヴァルドルフ学校が誕生したのが現在のバーデン・ヴュルテンベルク州の州都、シュトゥットガルトであり、ヴァルドルフ教育の学校における実践が、戦時中の中断期を除いておよそ80年間継続してきたのに対し、シュレースヴィヒ・ホルシュタイン州はヴァルドルフ教育の歴史が新しく、南部と比較して財政的に困難な状況にあることである。また両州政府が私立学校の設立・運営に対して対照的な姿勢をとっていることも理由の一つである。

使用した文献の中心は、ヴァルドルフ教育実践における親と教師の活動を扱ったものである。公刊されている文献、校内の機関紙、学校行事に関する掲示・回覧物、学校の教師や生徒、親などが運営するウェブサイト内の記述なども分析対象に含めた。

これらの調査は、2000年冬から2002年春にかけて、マンハイム、シュトゥットガルトのヴァルドルフ学校で、また2001年夏から秋にかけてシュレースヴィ

ヒ・ホルシュタイン州のリューブック、フレンスブルク、キール、エケルンフォルデの各ヴァルドルフ学校で行なった¹¹⁾。

学校訪問によって実施した調査は、親、教師へのインタビュー、およびアンケートである。両調査とも、むろん回答の妥当性を評価するものでなく、その発言の内容、言葉の遣い方などから浮かび上がる社会観・教育観を分析するためのものである。

親に対するインタビューは、2001年9月、リューブックのヴァルドルフ学校において母親2人に対して行なった。2人とも、校内の「図書喫茶室」（次節参照）の司書当番を務めており、ここで週1回の担当日に4時間の仕事をこなしている。およそ2時間半にわたって、当日の当番であった1人の母親に対するインタビューを行ない、後半はそれにもう1人の非番の母親が加わった。このほか、マンハイムのヴァルドルフ学校で父親にもインタビューを行った。アンケートはキール、リューブック、フレンスブルク、エケルンフォルデ、マンハイムの各学校に依頼した。質問数は40項目65問である。

教師に対しては、フレンスブルク、エケルンフォルデ、キールの各ヴァルドルフ学校で行なったが、このうちエケルンフォルデ、キールにおけるインタビューは勤務時間中だったこともあり、時間的制約があった。このため、全ての教師に同内容のインタビューを行なったわけではないことを付記しておく。アンケートは上記と同じ4校で、質問数は30項目51問である。

本論の特徴は、ヴァルドルフ学校の親への注目である。それは次の理由による。学校文化の中心は、学校の本質的役割であるところの知識の伝達行為であり、その意味では伝達者でも被伝達者でもない親はいわば「脇役」である。しかし、自らの意志をもって子どもを学校に送り込んだ時点から、親は学校を構成する当事者の一つとなり、学校文化に接し、それを共有する成員となる。

加えて、ヴァルドルフ学校は他の学校に比べて学校運営に親が関わる領域が大きい。つまり、彼らは学校文化の維持に、より積極的に関わるということになる。

しかし、学校文化と親との関係はそのように限定的なものであろうか。たしかに従来の親と教師の捉え方においては、学校という場を離れば親も教師も単なる成人に過ぎず、両者の役割は学校に極めて依拠したものになる。だが、生活時間の大部分を学校で過ごす子どもや教師とは異なり、親には学校外の環

境に触れる機会がより多く与えられている。学校外の環境から親によって持ち込まれる思考や行動様式が、学校文化に影響を与え、変化を引き起こすとするれば、親を学校文化の維持だけでなく、展開の担い手に位置付けることも可能になる。

この際考えられる「展開」にはさまざまなものがある。まず、「我が子」が主要な目的であり動機であるはずの親の校内活動が、いつしか「子どものため」を越えて、親自身を豊かにしていく、ということである。より具体的には、学校で行われる講演や学習・読書グループなどにおける自己啓発活動。自発的な読書などもこれに含まれよう。また、親が学校の運営、父母会で教師・他の親とのやりとりを通じて自らを変えていくことも考えられる。これらは、学校文化の担い手自身の変化である。

学校文化において親によってもたらされる展開としては、次のような状況が考えられる。まず、親が期待していたような学校への関与ができずに、そのコンフリクトや妥協から生じる展開。そして、経営観など、親が職業世界などから持ち込む要素を、ヴァルドルフ学校の変革に生かしていく試みである。

学校文化の大きな拠り所とは、ヴァルドルフ学校の場合はルドルフ・シュタイナーの思想ということになる。だが、それのみにすぎないのであれば、ドイツに約180校、世界各国に約800校あるヴァルドルフ学校間の差異が生じることは考えにくい。学校を構成する成員の思考・行動様式や価値観、学校の置かれる社会的環境も、学校文化に影響を与える要素になり得るし、それ以前にシュタイナーの思想を受け入れ、解釈する仕方にこれらの要素が作用する可能性もある。

1 ヴァルドルフ学校の内と外における「社会」

1-1 教育、そして社会について親・教師の持つイメージ

1-1-1 プロフィール・教育観につながるいくつかの要素

回答者の親・教師のうち、自分がヴァルドルフ学校に通学した経験のある者は、教師ではゼロ、親でも2割弱にすぎず、少数派といえる。自分が子どものとき受けた学校教育については、この2割弱の親は満足しており、残りの親においては4分の3が不満足、4分の1が満足、一人が無回答であった。他方、

半数以上の教師は、自分の受けた学校教育に「満足している」と答えていた。回答した親は母親がほとんどであり、専門的な養成を前提とする職業を持っている者が大半を占め、医療職・教職が目立つ。教師の回答者の男女比は3対5で、4分の3が前職を持っており、うち半数が教職、残りはエンジニアや研究職、アーティストなどであった。

親が子どもをヴァルドルフ学校に通学させるようになったきっかけや、ヴァルドルフ教育に関する情報を獲得するために参考にした文献名などを総合すると、ヴァルドルフ教育への親の関心が、子どもに与える学校教育の選択肢としてのみに限定されるのか否かが、注目すべき点の一つになるであろう。親から挙げられた文献名は、ヴァルドルフ学校の教育方法・内容を紹介し論じる現代の著者によるものと、シュタイナー自身によって語られた人間観や教授法、哲学・認識論とに分かれる。また、我が子の就学をきっかけにヴァルドルフ教育に接近していくケースと、それ以前から人智学に親しんでいたケースへの着目の必要もあろう。

ドイツのヴァルドルフ学校は学校建築にも特徴を持っているが、このような独特な建物への愛着を訊ねてみると、ほとんどの回答者が自分の子どもの学校だけでなく、他のヴァルドルフ学校の建物にも好感・親しみを覚えていることがわかった。「我が家のような懐かしい感じ」(40歳母親、以下年齢は調査当時)、「休暇に、ヴァルドルフ関係の他の施設に行ってみるのが好き。気分転換になるので」(40歳母親)、といった親の回答からは、他の学校の建物であっても、それを目にすることによって、学校で我が子が学び自分も活動する感覚・体験など身体化されたものを再現している様子がうかがえる。他方、そこを職場としている教師においては、「(他の学校の建物を見ると、)そこで働いている教師たちと同じ精神的・教育的目標を持っているのだ、と思えて、心が高揚する」(55歳男性)と、志を同じくする他校の教師への共感を表現する回答者もあったが、「親にも教師にも、建物のメンテナンスをする時間がもうちょっとあったらいいのだが」(34歳女性)、「美しく、愛情のこもった建物に仕上がっていれば、見るのが楽しい」(46歳女性)、「心に響く建物もあるが、ひとり立ちした芸術性がなく、ステレオタイプ化された外観を持つ建物を見ると、ときどきゾッとする」(40歳男性)といった回答が目立った。親に比べて教師たちは、「あるべき学校空間」のイメージを明瞭に持っているようだ。

1-1-2 外への視線と外からの視線

(1) メディアへの態度

多くのヴァルドルフ学校がインターネット上で自らのサイトを運営するようになり⁴²⁾、上級学年でコンピューター・リテラシーの授業を行なう学校も増えた⁴³⁾。だが、ヴァルドルフ教育の中にコンピューターを入り込ませることに対する抵抗感は、かなり根強く存在するようだ。「図書喫茶室」の母親の1人は、「この学校では11年生からコンピューターの授業を選択できるが、自分はできるだけ遠ざけたい。上の子（現在9年生）は興味を持っており、友人の家で遊んでいる。幸い、コンピューターの授業を受けられるようになるまでは、まだあと少し時間があるが。コンピューター教育は時代の流れ。授業を行なうに際して、議論はほとんどなかったが、もちろん色々な考えの人はいる」と、世の中の傾向を認めつつも、コンピューターへの抵抗感をも表現している。学校のサイトの中の「図書喫茶室」のページも閲覧したことがない、という。

多くの今日の課題に直面しているヴァルドルフ学校の現状を伝えた *Die Zeit* 紙の教育欄記事“Wandel unter Druck”に対してある父親が自分の子どもの通うヴァルドルフ学校の機関紙に寄せた投書も、学校の中にコンピューターに対する忌避感が存在することを暗示している⁴⁴⁾。

アンケートの親からの回答において、ほぼ例外無く敬遠傾向にあったのが漫画であり、自分が読む、という親は無く、子どもを漫画に近づけさせることを避けているケースがほとんどであったが、「子どもを全てのメディアに近づけ、付き合い方を覚えさせる」という回答もわずかながらあった。親にもっとも抵抗感の少ないメディアは書物および新聞であり、テレビはなるべく子どもに見せないようにしている、という回答が多数で、活字に対する根強い信頼感を感じさせる。インターネット利用については、「好きではないけど役立つ」という親と、「有用で、好んで使う」という親に分かれた。また、「メディアはプロパガンダが多すぎるのであまり利用しない。それより人との対話を好む」と回答した親は、子どもおよび自分が利用するメディアとして、選択肢に挙げられたものの他に、「学習グループ」「フォーラム」「講演」を自由回答で記入していた。

教師による回答では、生徒に近づけさせているものとして質問紙に挙げられた全てのメディア（新聞・テレビ・ラジオ・雑誌・書籍・漫画・インターネッ

ト)を肯定した回答者が一人だけいたが、自身はテレビ・インターネット接続環境を所有せず、漫画も読まない、と答えていた。

(2) 時事問題への関心

調査を実施した時期が、アメリカ合衆国での同時多発テロ事件の直後だったこともあり、どのインタビューでも必ずテロやアメリカ、あるいはアフガニスタンの話題が出た。もっとも、報復攻撃の見込みすらまだ明らかになっていない時期であり、事件の衝撃などについて語るにとどまり、各自の意見を聞くまでには至らなかった。

アンケートでは、親・教師とも教育問題に対する高い関心が表れていた。しかし、親の回答では教育問題と並んで、政治問題（外交・選挙）や環境・食品安全（核廃棄物処理、狂牛病、遺伝子技術）などに関するトピックが挙げられていたのに対し、教師の回答では教育政策、あるいは子ども・若者の問題以外のテーマはほとんど書かれていなかった。「自分の生活の一部」（教師・57歳女性）など、自分に身近なトピックであることが、関心を持った理由に挙げられていることから考えても、日常生活における問題関心が、とりわけ教師の場合は職業から相当強い規定を受けているようである。

(3) 社会とヴァルドルフ学校との関係

「社会に対してヴァルドルフ学校はどういう関係を持つべきだと思いますか？」という質問に関しては、設問にやや戸惑ったのか、無回答の親もいた。一方、社会に対する自分の学校の姿勢に概ね満足している一人の母親（35歳）は、「宗教の授業のためにプロテスタント教会から牧師が来ているし、学校のホールは『外の』行事のためにも貸している。待降節のバザーには、ヴァルドルフ学校に関係のない人々もやってくる」と、学校外からヴァルドルフ学校に「入ってくるもの」への意識が強かった。他方、学校内部の社会に対する姿勢を批判的に捉えた意見もあった。ある母親（40歳）は、「ヴァルドルフ学校はもっと開かれるべきで、エリートのような、あるいは浮いたような感触（Touch）をなくしていかなければならない。しかも、精神的な努力と誠実さを維持したままで」と記述した。彼女がその意識下で、ヴァルドルフ学校の「精神的な努力と誠実さ」の中に、社会において浮いた存在に見られる要素が含まれている、

と感じていることが、この「しかも」に表れている。また別の母親（39歳）は、「自分の経験からすると、社会的環境とうまい具合に結びついている学校は、より良い定着のしかたをするものだ。うちの学校は、ところどころ、全く知られていない部分があり、それゆえに仮に学校がなくなったとしても、惜しいとは思われないだろう。これは厳しい状況だ」と書いている。社会からの一定の支持を得るほどにまで、自分の学校が認知されていない、とこの母親は意識しているのだ。

「自分たちの学校が社会に対して持っている関係について知っていることを書いてください」という設問に対しては、回答の傾向が2つに分かれた。一つは、バザー、あるいはコンサート・講演会といった学校の行う文化的行事を公開することによって、学校周辺に対してオープンな姿勢をとっている、とするポジティブな意見である。もう一つは、市や州といった大規模な社会単位で行われる学校教育や政治に関するイベントへの積極的な参加、教会とのより密接なコンタクトなどを促す、現状に批判的な意見である。前者の回答における「社会」が、地理的な意味のみならず、ヴァルドルフ学校に比較的近い感情を持っている人々によって構成されている、という意味においても、「学校周辺」に限定されているのに対し、後者の回答が意図するものは「市民社会」のそれである。「社会」を、学校外のどの範囲でとらえるかが必ずしも一律でないことに留意しなければならないだろう。

「社会はヴァルドルフ学校についてどう考えていますか？」という質問には、「偏見を持っている」という、ネガティブな見解が親の回答にはかなり多かった。偏見の内容は、「学校がセクトのように思われている」（37歳母親）、「ヴァルドルフ学校の生徒は有能ではない、社会的ではない、甘やかされている、と見られている」（35歳母親）等である。偏見が生ずる原因としては、ヴァルドルフ教育に関する社会における「情報不足」を、複数の親・教師が挙げていた。なお、この質問に関する教師の記述は、「大雑把」「さまざま」「偏見が多い」など、親に比べて短く、内容を詳しく書いた教師はほとんどなかった⁶¹。

「社会を変えることに貢献できる人材をヴァルドルフ学校は育てていると思えますか？」という設問は、親と教師の回答にもっとも相違の見られたものであった。この問いに対して、親の中にはある種の戸惑いが見られた。「ヤイン（ドイツ語で『はい』と『いいえ』の中間のニュアンスを持つ言葉）」という回

答をしたある母親は、「子どもの中のそのような性質が伸びるように促すことはしているが、ヴァルドルフ学校だけでそのようなインパルスを与える、などというのは不可能。そういう要求 (Anspruch) は思い上がりだと思う」と記した。「ヴァルドルフ学校で多くの子どもたちを教育することによる社会への影響は間接的なものでしかない」という回答もあり、「はい」という回答の中にも「他の学校の生徒も同じように社会を変えられる」と付言する記述があった。回答欄が「はい」と「いいえ」の二択であったにもかかわらず、回答に記述を付け加え、留保条件を挙げる親が多かったのに対し、教師の回答はほぼ全てが「はい」一言のみであった。

(4) 「公立学校」観

親・教師に、「ヴァルドルフ学校と公立学校はお互いにもっと近づくべきか」と訊ねてみた。何人かの親の回答では、公立学校はヴァルドルフ学校に近づくべき、あるいはいくつかの要素ですでに近づきつつある、という認識が示された。「(私立学校は) その特徴を発展させ、独自性を保つべき。評点は2・3年生から与えられるようになるなど、ヴァルドルフ教育の多くの考え方が公立校でも採用されており、子どもたちはうまい具合にやっている。地域においてヴァルドルフ学校と他の学校の協力関係は非常に重要だと思う」(39歳母親)、「多様性は有益なものだと思う(競争がビジネスを活性化させるように)。通信簿に代わる評価の形式や1年生からの外国語授業の導入など、ヴァルドルフやモンテッソーリといった自由学校によるインパルスは、公立学校でもすでにだんだんと受け入れられてきている」(35歳母親)というように、ヴァルドルフ学校の側からあえて公立校に近づくことをせずとも、公教育の改革が自分たちの方向に進んでいる、という意見だ。もっとも、公教育における変化について、「その背景にある人間像を捉えないままに方法だけ取り入れるのは難しい。双方の持つ独自性を保つべきだ」(40歳母親)と、冷静な見方をする回答者もいた。教師においては、「近づくべき」と回答したのは49歳の女性ただ一人であり、残りの教師は、多様性を重視し、互いの独自性を理解し合った上で刺激を与えられればよい、との意見であったが、その要素を具体的に挙げた回答者はいなかった。

ヴァルドルフ学校と公立学校の間における生徒を比較してもらったところ、

親も教師もさまざまな言葉を用いてヴァルドルフ学校の生徒を描写してくれた(表1)。

親		教師
寛容である, 注意力がある, 正直である(2), 礼儀正しい, 社会的規範を守る(3), 気配りができる, はっきりしている, 他者に共感できる	社会性	雄弁である
自信がある	自信	自信がある(3), 大胆である
遊ぶことが好きである	子どもらしさ	子どもらしい時間が長い, 紅い頬をしている, 外見が健康的である
自然である, 前向きである	生きる姿勢	活発である, 生きることを楽しんでいる, 時折遠回りをすることも厭わない
先入観がない, 創造的である(2), 想像力に富んでいる, 幅が広い, バランスがとれている, 多面的である, 全面的認知ができる, 発想が豊かである	しなやかさ	想像力に富んでいる, 創造的である, ユーモアがある, 着想豊かである, 多面的である
音楽的である, 手仕事が得意である	芸術性・実用性	芸術的である(2), 手先が器用である
教養がある, 思考力が優れている	知的活動	
さまざまな領域に精通している, 人間として見られている, 成績の重圧が少ない	その他	(相違は)無し

表1: 公立学校と比較した場合のヴァルドルフ学校の生徒を描写するために回答中(自由回答)で使用された語(カッコ内は, 複数の回答のあったものの回答数)

親は、ヴァルドルフ学校の生徒の社会性やしなやかさを高く評価している。これに対し、「紅い頬」などいわゆる「子どもらしさ」を強調する教師が何人かいたのが目を引く。設問が「公立校の生徒との比較」であるため、親や教師の公立校へのイメージをある程度反映しているとも言えるだろう。また、自分の子どもをヴァルドルフ学校に通わせることを決めた理由を、「学校からくるストレスが少なく、実用的な授業、芸術的な授業が多いから」（年齢未記入・母親）と説明する親がいるなど、子どもにかかるプレッシャーの多少、授業における芸術性・実用性に価値を置く親も多いようである。

(5) 「個の自立」像

ヴァルドルフ教育を受けた子どもの将来の姿を、親と教師はどのように思い描いているか。このことに関して、『『自立した個人』とは何か』および「どのような人間に子どもを育てたいか」という2つの質問を投げかけてみた。

前者は、筆者が7年前にルール工業地帯の2つのヴァルドルフ学校を訪ね⁶⁾、それぞれ一人ずつの教師にインタビューを試みたときに発した質問であり、二人のそのあまりに対照的な表現——「自分の進む道を自分で決められる人間」と「上に伸びていく力と下に根付いていく力のバランスの取れた人間」——が印象に残ったため、今回の調査にもこの問いを投じた。

ある母親（35歳）は「責任」という言葉を用い、「自分の中に隠れている個性を、どんなことをしても離さずにいる責任を自覚している人間」と表現した。彼女は「自立」という概念を説明するときにも「周りの状況の犠牲にならないための権利と責任」を持つこと、と記している。また別の母親は、「集団の中でも異質の考えを支持できる、沼地のようなところからでも『自分のお下げ髪』を引っ張って脱出できる（＝しがらみから自由になれる）人間」と記している。いずれの親も、「個」のかなり強い確立を求めていることが窺われる。だが、二人もそれ以外の親も、後者の質問に対して「社会的な（sozial）」（多数）あるいは「共感的で共思想的で共行為的な（mitfühlend und mitdenkend und mithandelnd）」（46歳母親）という語を使っており、この「個」の確立が公共性に対して極端に突出することまでは意図されていないようである。むしろ、「自信があり、社会的、批判的、自分の意見を主張できる」（37歳母親）などと並べられた概念からは、公共圏に対する極めて積極的な姿勢を持つ人間像が

浮かぶ。

一方教師は、前者の質問に対し、「深い自信と洞察をもち、周囲へのコンテキストを伴って（つまり思いやりをもって）振舞う人間」（34歳女性）、「自分の生命の衝動（Lebensimpulse）を認識し、うまく扱うことのできる人間」（40歳男性）など、親の回答に比べてより内面の成熟を重視した意見が目立った。親の考える、市民社会で行動し、主張するものとしての「個」とは趣が異なる。

後者の質問に対する教師の回答においては、親からの回答に頻出した「社会的」の語が全く使われておらず、「自由で自立した人間」（49歳女性）「他者や他のものに対して関心を持ち、愛情をもって行動することのできる自由な人間」（40歳男性）など、「自由」という言葉が非常に多く見られた。

（以下、次稿へ）

- (1) なお、2000年後半から2001年前半にかけて実施した調査については、「財団法人 松下国際財団」研究助成金の援助をいただいた。改めてここに感謝の意を記したい。
- (2) www.waldorf.net/のリンク集に登録されているドイツのヴァルドルフ学校のサイトは2001年12月10日現在で78。
- (3) *Die Zeit*, 21/2000: “Wandel unter Druck”によると、ドイツのヴァルドルフ学校180校のうち、147校がコンピューター情報処理の授業を行なっている
- (4) 3人の子どもをマンハイムのヴァルドルフ学校に通わせているこの父親は、現在の技術の発展から目を背け、あえて時間の流れを止めるようなやり方もあり得るが、現実には、もはや「コンピューター教育をやるかどうか」の議論ではなく、「どのように行なうか」を考察しなければならない段階に来ている、と訴えている。子どもたちの将来にとっては、コンピューター、特にワープロや表計算などのアプリケーションソフトに関する知識が、作業ツールとして欠かせないものになることを指摘した上で、コンピューター教育について「子どもの将来と幸福を重視するなら、学校教育や職業教育は力のない後ろ向きの姿勢で問題を避けるべきではなく、現在ある問題の解決のために前を向いて勇敢に取り組んでいくほうが良い」と呼びかけている。ただし、ここでは情報獲得手段としてのコンピューター利用には触れられていない。（マンハイム・ヴァルドルフ学校機関紙 “*Kiesterichte*” 2000年6月号4～5ページ）
- (5) ちなみに、ヴァルドルフ教育とかかわりのない子どもを持つ親や一般の大学生にヴァルドルフ学校への印象を訊ねてみると、もっともポジティブな答えでも「学校教育の一つの選択肢で、芸術科目の授業が充実しているから、晩生の子には良い場所だろう」というものであり、大半が「効率が良くない（nicht leistungsfähig）、子どもが大学に行けない」と否定的に応じた。セクト云々の反応はなかった。
- (6) 1996年9月にエッセンおよびボッフム・ランゲンドレーアのヴァルドルフ学校を訪問。